

## 武蔵野日曜集会 聖霊降臨節

## 聖霊の霊能

## ——ローマ書第8章1～39節——

1994年5月22日

小池辰雄

第50日目 霊的生命の中に入る 詩『虹霓』 聖霊降臨節 汝ら能力をうけん 詩『流浪者夕  
 テの苦難』 詩をもって世に訴える 砕けも無も無条件に賜る 霊然と顕然 御霊の執成し  
 キリストと一つになっているか

## 【ロマ8:1～39】

1 この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。2 キ  
 リスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放し  
 たればなり。3 肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、  
 即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。  
 4 これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為な  
 り。5 肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。  
 6 肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。7 肉の念は神に逆う、それ  
 は神の律法に服わず、否したがうこと能わず。8 また肉に居る者は神を悦ば  
 すこと能わざるなり。9 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは  
 肉に居らで霊に居らん。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあら  
 ず。10 若しキリスト汝らに在ざば体は罪によりて死にたる者なれど霊は義に  
 よりて生命に在らん。11 若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊  
 なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給い  
 し者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活かし給  
 わん。

12 されば兄弟よ、われらは負債あれど、肉に負う者ならねば、肉に従いて  
 活くべきにあらず。13 汝等もし肉に従いて活きなば、死なん。もし霊により  
 て体の行為を殺さば活くべし。14 すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の  
 子なり。15 汝らは再び懼を懐くために僕たる霊を受けしにあらず、子とせら  
 れたる者の霊を受けたり、之によりて我らはアバ父よと呼ぶなり。16 御霊み  
 ずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。17 もし子たらば世嗣  
 たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。これはキリストと



もに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る。

18 われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。19 それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。20 造られたるものの虚無に服せしは、己が願いによるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。21 然れどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光栄の自由に入る望みは存れり。22 我らは知る、すべて造られたるもの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。23 然のみならず、御霊の初の実をもつ我らも自らの心のうちに嘆きて子とせられんこと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり。24 我らは望みによりて救われたり、眼に見ゆる望みは望みにあらず、人その見るところを争でなお望まんや。25 我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。

26 斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う。27 また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に適いて聖徒のために執成し給えばなり。28 神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。29 神は予じめ知りたもう者を御子の像に象らせんと予め定め給えり。これ多くの兄弟のうちに、御子を嫡子たらせんが為なり。30 又その予め定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光栄を得させ給う。

31 然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。32 己の御子を惜まずして我ら衆のために付し給いし者は、などか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。33 誰か神の選び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。34 誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在して、我らの為に執成し給うなり。35 我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。36 録して『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。37 然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。38 われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、39 高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

## ● 第50日目

「ペンテコステ」というのはギリシア語で「第50日目」という意味です。キリストが復活



してからちようど7×7＝49日、7週間のその翌日がこの第50日目ということですが。

「復活」というのは、ただ息を吹き返したなんてものではない。キリストの本来の霊生が現れたということ、復活なんていう言葉は本当はあまり当たらない。キリストは、十字架の死は贖罪のために遂げられた。決して死ぬようなひとではない。いきなり天界にいくひとですから。エリヤは天界にいつてしまった。まして、キリストにおいては、イエスは天界にすぐ行けるひとです。霊体に化する。

聖書の預言書とか、キリスト・使徒たちの現実というのは凄い現実ですから、皆さん、そのつもりで読んでください。聖書は単なる意味の世界ではない、凄い生命的な霊的生命の世界だ。

「聖書を読みながら、そういつた霊的生命が迫ってきて、その中に一緒に入る」という読み方をなさるように。

### ●詩『虹霓』

中国に関する本を読んでいたら、中国には「虹」という字がないという。中国では虹のことを「弓」という。空の弓、天の弓、これが虹です。光の弓です。私は虹が好きだから、時々、自分のことを「天弓」と書く。偶然にそうなんで、面白いなと思った。

前に私は虹を見て、ソネット（十四行詩、独和対照）を書いた。

『虹霓』（1989年8月28日作）

西の方 かた 山なみの上 え に 陽の佇 たたず めば、

東の方 知らぬ間に雷雨襲ひ来ぬ。

湖上には夢の如 ごと、虹霓 こうげい を現はる、

夏の雷雨の去りにしあとに。

何ぞ奇 く すしき、陽光は無色なり、

小さき雨滴も無色なるに、

陽光烟霧 えんむ を照 ぬ り貫 ぬ けば、

七彩の虹霓立ち現はるとは！

われらは一つなり、我らはみな人間なるぞ、

さはれ我らは一つに非 あ ず、各人固有 おのがじし の顔 か ばせと

さまざまなる資性 さが と色彩異なる才能を有つ。

そは人々の調和 虹彩の如く表はれんためなり。

上よりは天意の顕現臨むべし、

そはおのが光彩の使命を果さんためぞ。

『エン・クリスト』41号掲載

虹のことは特にエゼキエル書一章に出ている。



「その周囲の輝光は雨の日に雲にあらわゆる虹のごとし、エホバの栄光かくのごとく見ゆ我これを見て俯伏したるに語る者の声あるを聞く。」(エゼキエル1:28)

### ●聖霊降臨節

キリストの復活から50日目、正にペンテコステに祈り待っていたら、聖霊がのぞんだ。それで「聖霊降臨節」という。復活節のあとの50日目、7日の7倍、49日の翌日ということ。旧約では、穀物の最初の稔りを神前に献げる。これを「素祭」という。穀物を供える祭のことです。最初の穀物を最初に献げた日がこの「素祭」の日なんです。これはレビ記23・15に出ている。

「15 汝ら安息日の翌日より即ち汝らが播祭の束を携えきたりし日より数えて安息日七をもてその数を盈すべし。16 すなわち第七の安息日の翌日までに日数五十を数えおわり新素祭をエホバに献ぐべし。」(レビ23・15～16)

また、申命記の16章に、

「9 汝また七七日を計うべし、即ち穀物に鎌をいれ初る時よりしてその七七日を計え始むべきなり。10 而して汝の神エホバの前に七週の節筵を行い、汝の神エホバの汝を祝福たもう所にしたいが汝の力にに応じてその心に願う礼物を献ぐべし。」(申命記16・9～10)

とある。これは素祭のことだ。これを「七七日の祭」「七週の節筵」という。キリストのいらつしやった頃もやはり、その意味で——「ニサンなななぬかの月」の16日から4週間目の日だと言っている——それが福音の世界になると、数の上では関係して居るけれども、内容的には正にその日に聖霊が臨んだ。だから「聖霊降臨節」というわけです。「ペンテコステ」というのはひとつも「聖霊」という字ではない。キリストは、

「お前たち、祈って待っている、聖霊が臨むから」

と仰った。それで今日は、あなた方は今聞きながら、私は語りながら、聖霊の世界に入っていないかもしれない。

### ●汝ら能力をうけん

使徒行伝第一章に、

「8 然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん」(使徒1:8)

とある。今のキリスト教界で本当に聖霊を受けているクリスチャンがどれ位いるか。その証人となっているのがどれ位いるか。非常に情けないはなしです。「十字架、十字架」ということは皆よく言う。けれども、言うだけではダメなんだ。本当に十字架されれば、その



後から聖霊が臨む。これを一番はつきりとしたのは何ととってもパウロです。パウロのローマ書8章は聖霊の章といつてもいい大事なところですよ。

1 この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。2 キリスト・イエスに在る

キリストと一緒に住んでいるところの、

生命の御霊の法は、

生命的な聖霊の法則は、

なんじを罪と死との法より解放したればなり。3 肉により弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、

律法ではどうにもならん。かえって苦しくなつてダメになつてしまふ。ところが、律法の世界から福音の世界に、旧約の世界から新約の世界に、我々は入れられている。

即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。

4 これ肉に従わず、

「肉」というのは生まれつきの自分の考えや思いや、それをみな「肉」という。

霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。

律法が要求しているところの義を本当に全うするには律法の下にはダメなんだ。

5 肉にしたがう者は肉の事をおもひ、霊にしたがう者は霊の事をおもう。

「霊」とは聖霊のことです。「 pneuma」という字です。

6 肉の念は死なり。霊の念は生命なり、霊の念は生命なり、平安なり。

この6節は大事です。生まれつきの我々のいろいろな考えというものはみな亡びていく。けれども、キリストの霊をいただいて、それにおいて思うことは生命的である、本当の平安がそこにある。それは、十字架が土台でなければダメです。十字架の土台に聖霊が臨んでくる。十字架だけではダメ、聖霊だけでもダメです。十字架と聖霊は分けることができません。キリストの贖いを完全に私たちは無条件に受けとるのですから、そこに聖霊が臨んでくる。本当にそういう祈りをしてますか？ 深く十字架を冥想して、

「我れキリストと共に十字架せられたり、もはや我生くるにあらず。キリスト

わが内にありて生きたもうなり」(ガラテヤ2・20)

と。「キリストわが内に」というのは、

「キリストの霊が、御霊のキリストがわがうちに生きたもう」

ということ。これはパウロの告白です。

7 肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず、8

また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。9 然れど神の御霊なんじら

の中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん。

「霊に居らん」ではなく、「霊に居る」です。



キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。クリスチャンというのは聖霊を持ってなかったら、クリスチャンなんて言ってもダメなんだ。

『聖霊の霊能』<sup>はたらき</sup>と今日は題した。聖霊というのものはもの凄い内容をもっている。私は何でもいろいろな事をやっているのは、みなこの聖霊の働きです。今、詩を書いてますけれども、力がくるから疲れない。それは本当だから仕方がない。自分の考えや何かでやったら、くたびれますよ。大体、その文章や詩に力が入らない。

私はいろいろな詩を書いていくけれども、仏教の偉大な坊さんのことを書くときだって、みな御霊の力で書いています。この詩ができたら、皆さん、驚くよ。法然、親鸞のことも書いてある。相手が法然であろうと、親鸞であろうと、何であろうと、御霊の光のもとで書くというと、普通の人の書けないようなことが出てくる。

### ●詩『流浪者ダンテの苦難』

これはダンテのことを書いた、私の大きな詩の一部分です。

『流浪者ダンテの苦難』

.....

情深きが故に愛に苦しみ、愛人の死に直面して

途方に暮れ迷路に踏み迷ひ、

魂苦しみ、学究思索の嶮路を踏破し、

祖国を愛するが故に政治の渦中に身を投じ、

悪と戦ひ、終に追放の悲運を刈りとりて

ダンテは流浪の人となる、底光ある孤独だ。

だが彼の最も厭いしものは何か。

「恥もなく、誉もなく、世をおくる者」

「神に逆らへるに非ず、また忠なりしにも非ず、

ただ自己中心に生きるエゴイスト」

かかる卑しき者は地獄第三曲に記されている如く、

「天国も地獄もこれを受くるを恥とする徒輩」。

ところがかかる類いは最も多い。

これほどダンテの唾棄したものはない。

「愛も義も彼らを蔑すむ」。

これが生涯十字架を負つ所以。

旗幟鮮明に彼は万事に対処したから

彼は流竄<sup>ろくせん</sup>十九年の苦杯を呑みほさねばならなくなる。



「いと深く愛するものを汝悉く棄て去らん。  
汝知るべし、他人のパンのいかり苦く、  
他人の階段きざはしの昇降からの辛きを。」

邪悪庸愚、忘恩反逆等の徒輩のゆえ、

汝唯一身を一党とするが汝に最もふさわし。」

追放令を聞くやダンテは直ちにローマを去る、

流浪の旅路で時折神秘的な異象を見る。

アルノの流れのほとりでベアトリーチエの如き

美はしき女の異象に出遭あつ。

愛は彼にとってしばしば霊的な具象である。

愛人が現世を去った霊的啓示現象か。

彼は義の戦のためには「運命に対して四角」だ。

運命や環境にめげず、彼は学究、眞理探究の鬼だ。

ボロニヤ、パリー、オクスフォードに飛雄したか。

執筆では『饗宴』『俗語論』などは恐らく一三〇八年以後の数年に。

ダンテは詩人であると同時に預言者的政治家だ。

つねに国状を想つて、言論風発。

.....

### ●詩をもって世に訴える

ブレイクであろうが、ダンテであろうが、何であろうが、私は魂の上で関係のある人たちを人物中心で取り上げては、詩に書いているわけです。詩をもって世に訴える。また、キリスト教界に訴える。そういう眞理の戦いを終えなければ、向こうの次の世界に往くわけにいかん。皆さんもそれぞれ使命がありますよ。御霊の力でやってください、男の方でも女の方でも。

使徒行伝1章にもどります。

「然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力ちからをうけん、

力も智慧も何でも入ってくる、

而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極はてにまで我が証人とな

らん」(使徒行伝1:8)

どこにおいても、あなた方一人一人がキリストの証者であるためには、聖霊のひとでなければできない。相手の人を、

「この人を救つてやろう」

と思つたら、とことんまで語り合つて——語り合うよりもむしろ話して——



「そういう世界があるんですか!」

と、驚かきなくてはいいかん。福音を伝えるためには遠慮はいらん。私は電車に乗っていて、隣の人に

「ああ、この人には何か話してやろう」

なんて思うときには、まずチョコレートかミカンをやってから、それから話をいろいろ始めて、

「宗教のことは?」

と聞く。

「いえ、宗教は関係ありません」

なんて答えると、

「ダメですよ、万人は本当は宗教人なんで、魂があるというのは、これは宗教界に属しているということですよ。仏道でもキリスト道でもどれでもいいから——どれでもいいと言ったって、この二つが大きな宗教ですから——とにかくそれを受けとって本当の生命的な世界に入らないと、霊的な世界に入らないとまったくいいですよ」

なんてなわけで、話すことがある。その人によりけりで、どの人にも話すわけではないけれども。君たちは、ことに若い人は同僚に言わなくてはダメだ。

「一遍とにかく来てみる」

と、この集会にひっぱってきて構わない。どういう人が来たって、私はひとつも拒みはしませんから。

### ●砕けも無も無条件に賜る

この聖霊は何も恐れるものがない。何しろありがたいね、この聖霊というのは。私から聖霊を失ったら、全くもぬけのカラだ。

「それでは、人間小池は立派か」

なんて、ひとつも立派ではありません。ガラクタみたくないやつです。けれども、ガラクタの中にこの御霊は宿る。こつちが立派でなければ宿らないというものではない。キリストの霊はどこにでも入ってくる。むしろ傲慢なやつの中には入ってこない。聖霊を受けるためには、こちらが砕けたる魂にならなければ。

「先生、なかなか砕けません」

なんて、砕けっこないよ、それはキリストの砕けをいただくのだから。砕けも無も何でも無条件に賜るんだから。自分の側は何も見する必要はない。詩篇51篇に書いてある。

「16 なんじは祭物をこのみたまわず。もし然らずば我これをささげん。なんじ  
また燔祭をも悦びたまわず。17 神のもとめたもう祭物はくだけたる靈魂なり。」



神よなんじは砕けたる悔いしところをかるしめたもうまじ。」(詩篇51・16)

と。キリストで砕けをいただいた。

「参りました、降参しました!」

と、キリストに降参しなければダメなんだ。福音書を読んで降参しなければ、本当の世界に入れない。

「私も幾分は入っている」

なんて、幾分もヘツタクレもない。100%降参する。そうすると、キリストの力が、霊が入ってくる。大体、降参させられたんだ、十字架で。

「お前は全部、十字架で砕けているよ。私の十字架でお前に砕けをやったから、どんな現状であつても、そんなことを心配するな」

と。賜りたる砕けにおいていただけばいい。聖霊は必ずくる。だから、十字架を無条件に受けとると、聖霊も無条件にやつてくる。そういうことですよ。

「聖霊というのは、どうなんだか知らないけれども、なかなか受けとれません」  
なんて、「受けとれない」もヘツタクレもない。

十字架を本当に受けとると——我々は十字架の贖いによらなければどうにもならんでしょう、相対的人間小池はどうであろうと、そんなものは問題でない。その奥に十字架で贖われたる小池というのがある——そこには聖霊が臨んでくる。だから、私はありがたくて、うれしくて、力が来てしようがない。本当ですよ。

「神のもとめたもう祭物は穀物ではない、くだけたる靈魂なり。神よなんじは砕けたる悔いしところをかるしめたまわじ」

と。「くだけたる靈魂」はヘブライ語で「ルーアツハ・ミシュバラー」という。

マグダラのマリヤが、キリストがもう十字架に架かりなさるといので、最後にやってきてナルドの香油をキリストに注いだ。彼女は七つの悪鬼を追い出されて救われた女です。そういう人はまた非常にキリストを愛したわけだ。その時にやって来て、ナルドの香油の壺を——ナルドの香油というのは高価な香油です、簡単に手に入らない——その壺を砕いて割って、もう使えない壺にしてしまう。その香油を全部キリストにそそいでしまった。これが本当の愛です、全身的な愛です。彼女自身が全く砕けた魂です。

「この女のしたことは、福音の伝えられるところ、全世界に伝えられる」とキリストは言われた。

何でも部分的ではダメなんだ、何でも全的でないと。全的というのは量的に言っているのではない。質的なはなしです。質の上で全的でなくてはいかん。やることが三分の一でも、その三分の一に全的な質が入ってなければダメなんです。全的というのはそういうこと。姿の中に全的なものがある。だから、それは満ちゆくところの三日月、満月をいだいてい



る三日月なんです。

### ● 霊然と顕然

ところで、ヨハネ伝16章に、

「7されど、われ実に汝らに告ぐ、わが去るは汝らの益なり。我さらずば

助主なんじらに來らじ、我ゆかば之を汝らに遣さん。」(ヨハネ16・7)

とある。聖霊のことを「助主」という。あるいは「慰め主」という。

「私は天界へいつてしまふ。そうしたら、私の代わりに助主を來たらせる」

ということ。助主とは聖霊のことです。だから、キリストと聖霊は離すことのできない存在であるわけです。キリストの御霊です。私が地上を去ったら、あなた方は私の書いたものを私だと思って、私の本を相手にしてください。

「13然れど彼すなわち真理の御靈きたらん時、なんじらを導きて真理をことごとく悟らしめん。かれ己より語るにあらず、凡そ聞くところの事を語り、かつ来らんとする事どもを汝らに示さん。」(ヨハネ16・13)

とく悟らしめん。かれ己より語るにあらず、凡そ聞くところの事を語り、かつ来らんとする事どもを汝らに示さん。」(ヨハネ16・13)

「真理の霊」という。「真理」というのはギリシア語の「アレーティア」という字です。これは「アレーテース」という字からきていて、この字は「レートー」という、「隠されたものを顕にする、隠れているものを現す」という字からくる。だから、「真理」というのは「顕なるもの、あきらかなるもの」という字です。

聖霊の世界は霊然たる世界、真理の世界は顕然たる世界です。霊然と顕然。霊然の方が深い。「霊の人」のことを「 pneuma ティコス」という。「真理の人」は「アレーティアコス」だ。あなた方はこちらの pneuma ティコス(聖霊の人)だ。

### ● 御霊の執成し

ローマ書8章にもどります。

26 斯くのごとく御霊も我らの弱きを助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて

「嘆き」ではなくて「呻き」です。嘆きという言葉はうまくない。呻きです。

嘆き(呻き)をもて執成し給う。27 また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に適いて聖徒のために執成し給えばなり。

我々のために執成すのはこの聖霊だ、知らないままに執成して下さっている。

28 神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。

それはどんなことでも、そうです。

29 神は予じめ知りたもう者を御子の像に象らせんと予め定め給えり。これ多



くの兄弟のうちに、御子を嫡子<sup>ちやくし</sup>たらせんが為なり。30又その予め定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光栄を得させ給う。

あなた方一人一人はその選びなんです、選ばれた者です。選びは神の栄光を現すため、その人の如何によらない。いわゆる立派な人も、いわゆるダメな人も、そんな相対的なものは問題でない。人間的立派さなんでものは考えない方がいい。かえって躓きになる。かえって、躓いたり転んだりしている者が神さまの栄光をあらわす。

それで、パウロは凱歌をあげている。

35我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難<sup>なやみ</sup>か、苦難<sup>くるしみ</sup>か、迫害か、飢<sup>うえ</sup>か、裸<sup>はだか</sup>か、危険<sup>あやうき</sup>か、剣<sup>つるぎ</sup>か。36録<sup>しる</sup>して『汝のために我らは、終日<sup>ひねもす</sup>、殺されて屠<sup>ほふ</sup>らるべき羊の如きものと為<sup>せ</sup>られたり』とあるが如し。37然<sup>さ</sup>れど凡<sup>すべ</sup>てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼<sup>よ</sup>り、勝<sup>あま</sup>り得<sup>り</sup>て余あり。

散々パウロは生命賭けのことをやっていますから。何度命を失おうとしたかわからない。そういう危険の中でも彼は護られてきた。

38われ確<sup>かた</sup>く信<sup>ま</sup>ず、死<sup>いのち</sup>も生命<sup>いのち</sup>も、御使<sup>みつかい</sup>も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、39高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

### ●キリストと一つになっているか

要するに、キリストの愛とキリストの生命に酔うが如くに入っていないならばダメです。キリストと一つになる。問題は、

「キリストと一つになっているか」

ということだけなんです。無条件に入れるんですよ。

「なかなかキリストと一つになれません」

ではない、これは絶対恩寵の世界だから。こちら側の如何にかかわらない。ただ投身<sup>なげみ</sup>すればいい。信ずるなんてダメです、投身でなければ。

「あなたはキリストを信じてますか」

と聞かれたら、

「私は信じてません、キリストの中に投身しています」

と、それくらいの返事をしなければダメです。キリストが神の子であることを信じたって何になるか。そういう命題を信じたってダメだ。ところが、そういう信仰の仕方が、観念信仰というのが多い。

私は朝4時半頃に目がさめて起きてしまう。ちよつとも眠くない。キリストの前に平伏せば、力が来るから、ありがたくてしようがない。キリストの前に平伏して一つにならないければダメです。私のようなず太い神交を、あなた方はもっていらつしやるのか何だか知



らないけれども、みんな体裁がよすぎるんだ、立派すぎるんだよ。破れかぶれのどん底で、ただ無条件でキリストの前に平伏してごらんよ、キリストに捕まるから。一日の終りに床の上に坐ってキリストの前に平伏して祈ると、何も残らない。

「み懐の中に寝かしてください」

と行って寝てしまう。本当ですよ、私の言っていることは。キリストをいただいた生命はもの凄い生命だから、死につこない。いわゆる死の関門をただ通るだけのはなしです。皆さん、烈々たる魂になってください。

「千万人といえども我ゆかん」

と孔子が言ったけれども、孔子に負けませんよ。「スプレンドッド・アイソレーション」(splendid isolation 輝かしき孤独)という言葉がある。正に「輝かしき孤独」だよ。イギリスのブレイクという詩人はそういう魂だった。

キリストの復活の後の五十日目に聖霊が臨んだ。とにかく、パウロがローマ書8章で言っているとおおり、

「聖霊を受けなかったらキリスト者にあらず」

ということ。パウロというのはキリストに逆らっていたけれども、ひっくり返されて本当に選別の器になった。自我の強い者は、ひっくり返されて、

「参りました!」

となると、今度は本当に忠実な凄い霊的な僕になる。ダンテが

「どつちつかずの者は地獄にも天国にも入れることができない」

と『神曲』に書いているとおおりだ。本当に光を望んでいるか、闇を望んでいるか、はつきりしない。闇を望んでいるやつは地獄に落ちる、

「お前は地獄が好きか」

というわけだ。ダンテの『神曲』を読んでごらん下さい、凄いから。あの「地獄・煉獄・天国」篇は大変なものだ。彼はいろいろな要素をもっていた人だね、それでなければ、あんなものは書けない。ダンテが向こうからやって来たら、女の人たちが

「地獄を出てきた人が来ました」

なんて言ったという話がある。

とにかく、無条件にキリストと一つになって、いよいよ勇ましく進んでください。そして、証し人であるということ。十字架・御霊の証し人です。聖霊だけではなくて、「聖霊」と言えれば必ずその奥に十字架を忘れてはいかん。「十字架」と言えばその後には必ず聖霊がある。我々は、十字架と言おうが聖霊と言おうが十字架と聖霊は離すことができない、そういう受けとり方をしてください。

「ここには聖霊のことしか書いてない。十字架のことは書いてありません」

なんて、いいよ、書いてなくなつて、その奥にあるから。

